

「死を思う時」

キリスト教センター職員
加藤俊彦



チャペルの暦では、11月1日が諸聖徒日、11月2日が諸魂日という祝日で、どちらの日も、その意味は死者を覚える日です。日本にはお盆に帰省して先祖のお墓にお参りに行く習慣がありますが、キリスト教にも、諸聖徒日や諸魂日にはお墓に向いてお祈りをする習わしがあります。ローマカトリック教会では11月を死者の月と呼び、墓参や追悼の祈りが献げられています。

死を思う時、死んだ後どうなるのか、死者はどこへ行くのかに関心が寄せられるかもしれません。しかし、死後の世界を経験した人の話を聞くことが出来ないので、実際のところ、その様子は誰にも分かりません。それよりも肝心なことは、私たちが死を身近に経験した時、深い悲しみや寂しさに襲われ、辛く、苦しく、立ち直れなくなり、人生の歩みが止まってしまうことです。人であれば必ず直面する死にまつわる悲嘆の中で、少しでも生き活きと生きていけるようになるにはどうしたらよいのか。死を命の視点から捉えてみると、見えてくるものがあるかもしれません。

聖書は、「主なる神は土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」と教えています（創世記2:7）。つまり、命は人間が獲得したのではなく、神様から与えられたものであり、命の出どころは神様ということになります。ゆえに命は神様そのもの、神様は命そのものと言うことができます。

また、聖書の他の箇所では、神様自らが「わたしはある。わたしはあるという者だ」と自分の名前を明かしています（出エジプト記3:14）。つまり、神様はどんなことが起ころうとも、何があろうとも「存在する」者であり、「なくならない」者ということです。

この二つの教えをまとめると、命＝神様、神様＝不滅、つまり命＝不滅ということになります。神様から与えられた私たちの命は、何があろうとも、たとえ死が襲ってこようとも、消えて無くなることはないということです。死によって、あの人の肉体は滅んで見えなくなったとしても、声が聞こえなくなったとしても、触れ合うことができなくなったとしても、あの人の命は常に「ある」ということであり、死によって、あの人との関係が切れてしまうことはないということです。

いずれ自分が死んだ後、あの人と天国で会えるというのではなく、肉体の縛りから解放されたあの人と、いつも一緒にいることができるということです。

もし、そのように捉え、信じることができれば、死によって、あの人を、またあの人のつながりを失ったと思ったことによる深い悲しみから立ち直す手立てになるかもしれません。キリスト教は、人間として生まれ、ただ一回きりの繰り返しが利かない人生を、いかに生きるかについて教える宗教であるが故に、誰しもが必ず経験する「別れ」にまつわる悲嘆の課題に、どのように向き合っていったらよいのかを伝えています。

ひとくちメモ

本学はキリスト教の一つの教派である聖公会（英国国教会）の精神に基づき建学されました。同教会は、1534年イギリスで起こった宗教改革を機に、ローマカトリック教会から分離独立しました。先月10月23日、イギリス国王チャールズ3世とローマ・カトリック教会の教皇レオ14世がバチカンにおいて共に祈りを献げました。この出来事は聖公会が英国において設立されて以来初めてのことであり、約500年に渡る両教会の溝を埋め、分離から和解、そして一致へと導く大きな出来事でした。